

家族の家族に属する

共同体生活の基本原則

ジェフ・リード著

小グループのための六課からなる聖書研究

基本原則

目 次

家族の家族に属する

まえがき — 生きた歴史 / 4

序文 — 家族の家族に属する / 6

基本原則シリーズ

多忙な現代社会 / 8

基本原則シリーズ I から III の概要 / 9

学び方の概要 / 12

第一課：キリストのご計画の中心 — 教会 / 16

第二課：家族の家族としての教会 / 25

第三課：信仰の家族の中で生きる / 34

第四課：家族の家族の中で生きる / 44

第五課：人生の優先事項を定める / 54

第六課：生活を一新する / 63

重要な聖書用語及び概念の用語解説 / 69

生涯教育 / 72

後注 / 74

序文 — 家族の家族に属する

人生で、一番必要なのは、所属意識と目的意識の二つを見つけることです。というのもこの二つがないと、落胆したり、孤独感に襲われたり、怒りを覚えたり、最悪絶望してしまったりと、ありとあらゆる否定的な感情に潰されてしまうことにもなるからです。実際、所属意識と目的意識がないということは、人生そのものへの敗北とも言えるのです。ところが所属意識も目的意識も、今日、特に西洋文明の中では、風前の灯です。私たちは所属意識とか、本当に意味のある人生の目的を持たない世代を生んでいるのです。

所属意識はどこから来るのでしょうか。所属意識の根底にあるものは、家族であるという意識です。所属意識は真の共同体に所属している時、最大限、最も強く味わうことができます。自分が家族の一員であるという思いと、その家族がさらに大きな家族に所属しているという思いが、健全な所属意識の土台です。しかし、家族とか共同体に所属しているということだけでは十分ではありません。目的を持った家族や共同体に所属する必要があります。神様は、私たちが、私たちは何か目的があってこの世に生まれてきたのだという思いを持つようにされました。ですから、人生を、目的意識のないまま10年また10年と、漫然と無意味に過ごすことを望まれないのです。

今日、残念ながら、西洋文化の中では、目的をしっかりとった家庭生活や共同体生活がどんどん崩壊しているのが現状です。家族の概念そのものが変わってきています。自分を中心に考えるように、すなわち、自分の目標や願望を達成するように、自分の仕事を確立するように、自分の必要を満足させるように、奨励されます。共同体の暮らしを取り戻す必要性を訴える多くの声や文化的な運動はあっても、自分の目標を達成しようとする思いに駆られています。西洋の個人主義の方に、いまだ筆配が上がっているのです。ようやく私たちは、私たちの周りにいる人々や、時として自分たちの家族や親戚の間でずっと前から顕著に見られるようになっていたことが、実は自分たちの文化が招いた結果であることに気が始めたのです。デヴィッド・ブランケンホーン (David Blankenhorn) の *Fatherless America* (父親不在のアメリカ) とマギー・ガラー (Maggie Gallagher) の *The Abolition of Marriage* (結婚制度の廃止) は、私たちの結婚及び家庭生活の崩壊を示している数多くの優れた著作の

つて彼らがクリスチャンになった時、ユダヤ教徒であった家族や友人は、ユダヤ教に戻るようにと激しく圧力をかけ、まずキリスト信仰の基盤を攻撃しました。この箇所から基本原則を本当に正しく理解していなければ成熟へ進むことは無理だということがはっきりします。

この小冊子は、基本原則を徹底させることで、それを基盤に成熟へと成長できるように配慮されています。新約聖書の時代から今日まで、どの時代にあっても、信者はこの基本原則を学ぶことが求められて来ました。初代教会では、新しく信じた人達は教会に受け入れられる前に、ディダケー（「教え」）を学ぶ必要がありました。ディダケーは新約聖書の基本的な教えを要約したもの、すなわち、基本原則でした。宗教改革（1500年代）の時代、この教えはカテキズム〔教理問答〕と呼ばれ、やはりクリスチャンが基本原則に精通できるようにするためのものとして書かれました。

基本原則の考え方は、生活のあらゆる領域で実際に重要です。これはあらゆる分野において質の高い教育を目指す時の核となるものです。約150年前、ジョン・ニューマンはその名著 *The Idea of the University*（大学の理念）の中で、ニューマンが基本原則の推進（pushing up the first principle）と名付けた考え方を述べています。ニューマンは、大学の目的は、あらゆる学問の基本原則を教え、それをあらゆるレベルの研究に用いて、基本原則を最大限探求することであると考えました。

私たちのクリスチャン信仰も同じです。一旦基本原則に精通すれば、生活のあらゆる領域でそれを用いていくことができます。つまり、成熟に向かう備えができるのです。『基本原則シリーズ』は信仰の基礎を確立できるよう十分な配慮がなされています。

クリスチャンになったばかりの人で初めてこの基本原則をきちんと自分の内に築く必要のある人も、理由はともあれ新たに基本原則を築く必要を覚えている人も、この学びを丁寧にやってみてください。必ず有益な人生を刈り取ることになるかと確信します。

第一課

キリストのご計画の中心——教会

このシリーズの第一巻、『主の弟子となる』で、私たちはキリストが弟子たちに、福音を携えて全世界に出て行き、信じた人たちにバプテスマを授け、教えなさいと命じられたこと、またバプテスマには共同体に入会するという意味が含まれているということ学びました。この共同体をキリストは、わたしの教会（マタイ 16:18）と呼ばれました。この課では、「キリストの教会」という概念を取り上げ、それがキリストのご計画全体とどのように合致するかを学んでみようと思います。まず、パウロがエペソの人に宛てた手紙の2章18節から3章11節を開いてみましょう。この中でパウロは、エペソにある教会に対するキリストの務め、すなわち、信じる者たちに対するキリストのご計画はどのようなものを啓示しています。そのご計画とは「キリストの教会」です。この箇所は、諸教会に宛ててパウロが書いた手紙の中心部分をなすものの一つです。この中でパウロは、諸教会に対する自分の務めについて弁明し、その上で、キリストのご計画の枠組みの概要を語っています。そしてこれは、それまで人類には知らされていなかったことでした。



みことばを学ぶ

聖書箇所を読みましょう：エペソ 2：18-3：11

質問を読んでよく考えてみましょう

1. パウロは異邦人にどのような啓示を伝えましたか。パウロの務めはどのようなものでしたか。
2. キリストの教会の土台を据えたのは誰ですか。礎石となったのは誰ですか。
3. キリストの務め（ご計画）とは何ですか。それはどのように神の永遠のご計画を成就するのでしょうか。

今読んだ箇所の中心的な教えをまとめてみましょう。

学んだことを、短く文章にまとめる、箇条書きにする、注解する、図式化するなど、自分にとって一番わかりやすい方法で書いてみましょう。パウロが自分の務めをどのように説明しているか、また正確に何がエペソの教会に啓示されたかについては、必ず触れるようにしてください。

エペソ人への手紙 2章 18 節から 3章 11 節の中心の教え

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



文献に当たる

以下の解説は、この箇所を理解を深め、教えの内容を深く考えるためのものです。

エペソ人への手紙2章18節から3章11節の短い注解を読んで考えてみましょう。

この箇所がエペソの教会に宛てた手紙の中に、なぜ入っているのか、さらには、この箇所がパウロの働き全体の中でどのような位置づけになっているかを理解することが大切です。この手紙は、エペソの教会に、キリストのみわざ全体と調和した生活をするよう励ますため書かれました。この手紙の前半は、キリストのご計画の全体、すなわち、キリストの務めとエペソの教会の人たちの「召し」について述べています。後半は、キリストのご計画に沿った生き方をするにはどうすればよいかと彼らの生き方を整えるキリストの特別な導きについて述べています。

この箇所でパウロは、自分に与えられた二つの働きについて語っています(3:8 - 10)。パウロには、福音を宣べ伝えることと、「キリストの務めが何であるかを明らかにする」責任が与えられました。福音を異邦人に携えて行くというパウロの責任は、ダマスコに向かう途上で回心した時に啓示されました。そのことは使徒の働き9章に書かれています。ここでは、この働きに加えて、パウロは、キリストのご自身の教会に対するご計画を明らかにするよう命じられたと書いています。「務め」という言葉は、ギリシャ語の、「家」(oikos)と「律法」(nomos)という二つの言葉から来ています。文字通りには、「家の規律」、「家の秩序」ないし「務め」という意味で、一般的には「計画」の意味に使われます。パウロの務めは教会に対して、キリストのご自身の教会に対するご計画を明らかにすることでした。そしてパウロは手紙を介してそれを明らかにしました。エペソ人への手紙2章11節から17節でパウロは、異邦人は神の約束から切り離され、神はイスラエル民族(ユダヤ人)を通して働かれたが、今や、キリストの死と復活のゆえに、ユダヤ人と異邦人の隔ての壁が打ち壊され、信じる人は、ユダヤ人も異邦人も等しく、一つの新しい家族、すなわち神の家族、教会とされると書いています。この新しい計画、ユダヤ人と異邦人が教会と呼ばれる新しい共同体の一つにされるという計画は奥義でした(3:1 - 7)。

「奥義」とは、かつては隠されていたが今は明らかにされている事柄に対して使われる言葉です。パウロはこの奥義を啓示すること、すなわち、家の秩序を明らかにするという特別な役割を担っていました。

ここでパウロは、いくつか、このご計画の大切な面を明らかにしています。この計画、すなわち、キリストの教会は、この世が神ご自身の知恵を理解する方法であるという点に注目しましょう。天使や悪魔の軍勢たちであっても、神の知恵を見ることができるのは、キリストの教会を通してなのです（3：10）。従って、天地万物にとって、教会が神のご計画の中心に位置しており、教会が神ご自身の目的を達成する中核となるということがはっきりします。

また、パウロが、ユダヤ人と異邦人の両方からなるこの新しい信者の共同体について、どのように述べているかにも注目しましょう（2：18 - 22）。この共同体とは、家族と建物（具体的には宮）、の両方を言います。これは生きた宮であり、信者の共同体です。共同体全体は、使徒と預言者という土台の上に建てられています。彼らが書いたものはすべて新約聖書の、諸教会と教会指導者たちに宛てた手紙、また、キリストの生涯、働き、教えを記した福音書の中に納められています。キリストが建物の礎石であり、建物はそこから建てられていきます。そしてその教会が成長し、神の霊が宿る、一つの生きた共同体へと成長し、全世界にイエス・キリストを宣べ伝えるという使命を達成するのです。

教会は今の時代、キリストのご計画の一番の中心です。さらに、神はご自分の教会に対して具体的な計画を持っておられます。パウロの務めの一つが、その具体的な計画を教会に明示することでした。それにより、神の知恵が、天使であれ悪魔であれ、それを見るすべての人に明らかにされるためです。

鍵となる引用を読んで考えてみましょう。

次にあげるのは、よく知られ、多くの人の尊敬を得ている宣教団指導者、マイケル・グリフィス（Michael Griffiths）の書いた *What On Earth Are You Doing? : Jesus' Call to World Mission*（いったいあなた方は何をやっているのか：世界宣教へのイエスの召し）からの引用です。

「前の章では、人々を一つにするためにキリストがなさることは何かを見ました。キリストは人々を光と愛の新しい共同体の一員に招き入

れ、「聖徒たちと同じ国民であり、神の家族」(2:19)とされます。西洋社会では、クリスチャン共同体のこの根本的な重要性を見失い、時として、教会を制度化されたキリスト教の中の付随的な組織に過ぎないと考える傾向にあるのではないのでしょうか。福音は、どうしたら個人が救われるかを教えていると私たちは考えています。しかし、エペソ人への手紙は、福音の本質は個人の救いと、一つの共同体を建てることの両方である言っています。教会は、個人の救いを助けるという恵みをもたらす、単なる付け足し的手段ではありません。私たちが地上にいる間、一時的に養い、守ってくれるだけのものではないのです。神が将来にわたって意図されていることは、ご自身が住まわれる、新しく美しい、贖われた人たちの社会を造ることなのです。」¹

次の引用はデヴィッド・ヘッセルグレイヴ (David Hesselgrave) の書いた *Planting Churches Cross-Culturally: North America and Beyond* (文化の壁を越えた教会開拓: 北アメリカそして世界に) という、神のご計画の中で果たす教会の中心的な役割について書いている非常にすばらしい本からです。

「様々なたとえの中に、教会とキリストの関係が語られています。教会はキリストの建物です - 『使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です』(エペソ 2:19 - 21)。教会はキリストの霊のからだです - 『いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです』(エペソ 1:23、I コリント 12:12、13 参照)。教会はいわばキリストの花嫁です - 主の愛と満たしの対象です(エペソ 5:25 - 33)。

従って、教会は神が後から考え出したものではありません。神は教会を永遠の昔に計画され、御子の死と復活を通して教会を生み出してくださいました(エペソ 1:19 - 23)。また御子は、弟子たちに彼らの使命を伝え、聖霊によって弟子たちを力づけ、教会の設立と発展のために備えられました(使徒 1:4 - 8)。キリストの教会と地区教会にとって、教会の主は優る友はいません! クリスチャンは、自分たちの主が愛されるものを愛するのが当然のことだとするなら、キリストの教会と地区教会を愛さなければなりません! 最後に、キリスト論は教会論に密接に結び付いています。ですから、人がどのような信仰を持っているか知りたければ、その人がキリストとキリストの教会をどのように考えているかを尋ねることです!」²



論点を考える

キリストのご計画の一番の中心にご自身の教会があるということは、キリストにある地区教会もご自身の計画の中心にあるということです。あなたは教会の重要性をどのように考えているのでしょうか。今日、私たちは共同体意識や所属意識というものを失い、個人的な目的や願いを追い求めようとする傾向にあります。キリストが私たちの信仰共同体に対する基本計画を持っていることの意味を考えてみましょう。

論点：キリストのご計画の中での教会の中心性

話し合いの前に論点を考えてみましょう。

1. キリストのみわざにおける教会の重要性を考えてみましょう。
2. 今日の私たちも、パウロによって明らかにされた、教会に対するキリストのご計画に従う必要があるのでしょうか。キリストのご計画に従うことは時代遅れではないと、どうしてわかりますか。
3. 私たちはこのご計画の詳細をどのように知ることができるのでしょうか。
4. 私たちが人生設計をする際、教会を中心に置くことは重要でしょうか。

話し合いの前に考えたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....
.....
.....
.....
.....
.....

小グループで話し合きましょう。

話し合いの後に自分の結論として考えたことを書きましょう。

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....



基本原則を適用する

今まで学んできたこと話し合ってきたことに、自分なりの
応答をする時間です。十分時間をとって考えましょう。

最初の三つの段階を思い起こしてみましょう。

自分の生活への適用を考えてみましょう。

出されている課題を完成させ、他にも思いついたことがあれば書き
ましょう。

課題 1. キリストのご計画の中心は教会であるということはどういうこ
とかについて、基本的なところを、まずまとめましょう。2. 教会をあ
なたの人生設計の中心に置くと、どうということが起こってくると考え
られるか、思いついたことを書き留めましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

第二課

家族の家族としての教会

第一課で、私たちは、パウロが、キリストのご自身の教会に対する務めを明らかにするという特別な務めを持っていたことを見ました。そして「務め」とは、キリストの教会に対する「計画」とか「家の秩序」を指す言葉であるということを知っていると思います。ではその計画とはどのようなものなのでしょう。キリストの教会、すなわちキリストの家族に対するキリストの務めについて、パウロはどこまで具体的に知らされていたのでしょうか。パウロが自分の伝道チームのメンバーであった、若くて忠実な指導者、テモテとテトスへ手紙を書いた時、パウロの考えの中心にあったのが、神の家族という概念でした。この課ではテモテへの手紙第一3章14節から16節を学びたいと思います。多くの人たちが、この箇所を、パウロの牧会書簡全体の議論の中心と考えています。牧会書簡とは、パウロがテモテとテトスへ宛てた手紙の全部、すなわち、テモテへの手紙第一と第二、およびテトスへの手紙を指します。



みことばを学ぶ

聖書箇所を読みましょう：Iテモテ3：14 - 16

質問を読んでよく考えてみましょう

1. なぜパウロはテモテに手紙を書いたのでしょうか。神の家族の中でどのように行動するかについて語ったとき、パウロは何を思い描いていたと思いますか。
2. 真理を守るために、地区教会に与えられている役割は何ですか。
3. この箇所では、福音を守るために教会の果たすべき役割についてどのように言っていますか。

今読んだ箇所の中心的な教えをまとめてみましょう。

学んだことを、短く文章にまとめる、箇条書きにする、注解する、

図式化するなど、自分にとって一番わかりやすい方法で書いてみましょう。適切な行動という考え方について、また真理と、すべての人に啓示されている福音を守るために教会がなさなければならない役割について必ず触れるようにしましょう。

テモテへの手紙第一 3 章 14 節から 16 節の中心的教え

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



文献に当たる

以下の解説は、この箇所を理解を深め、教えの内容を深く考えるためのものです。

テモテへの手紙第一 3 章 14 節から 16 節の短い注解を読んで考えてみましょう。

この箇所は一課で学んだエペソの箇所を理解する上で、非常に重要な平行箇所です。すでに確認したように、パウロの重要な仕事の一つは、キリストのみわざを成就するためのご自身の計画、すなわちその中心であるキリストの教会を、異邦人に明らかにすることでした。教会は神の家族です（エペソ 2：19）とあります。ここで重要になってくるのが、キリストの教会に対するご計画はどこまで具体的に示されているか、また私たちが神の家族の中でどのように行動するかがキリストにとって重要な関心事なのか、ということです。

この点を述べている主な聖句の一つが、テモテへの手紙第一 3 章 14 節から 16 節です。ここでパウロは、テモテへの手紙第一を書く目的を私たちに述べています。また、キリストの教会に対するご自身の計画の詳細を理解する枠組みを示しています。このテモテへの手紙の目的は、神の家族の中でふさわしく行動していくための方向を示すことでした。この手紙はテモテに宛てて書かれたのだから、ここでパウロが念頭においていたのは指導者がどう行動するかであるという人たちがいます。当然、神の家、すなわち家族としての教会で指導者がどのように行動すべきかも含まれていますが、ここでは、遥かにもっと広い意味で言われています。この手紙でパウロは、家族としてお互いどのような関係を持つべきか（5：1、2）、教会の家族の一員で、世話をする身寄りのないやもめに対する家の責任（5：3 - 16）など、家族のあらゆる問題を語っています。このことから、地区教会が本当の意味での神の家であったことが分かります。

さらに、パウロがこの手紙を具体的な一地区教会に宛てて書いているということに注目する必要があります。当時テモテがエペソにいたのでエペソの教会に宛てていますが、パウロはエペソの教会だけでなく、包括的に、あらゆる地区にある各個教会に対して語っていたので

す。ですからパウロは、クリスチャンが「自分の属する」神の家でいかに行動すべきかについて語っているのだということに気付くことが大切です。ギリシャ語の原文では、教会の前に定冠詞はついていません。従って、パウロが述べているのは一地区教会での行動についてです。エペソ人への手紙の「務め」という言葉は、文字通りには、「家の規則」とか「家の秩序」という意味であったことを思い出してください。パウロの務めは、キリストの教会、つまり神の家での務めを明らかにすることでした。ここでパウロはテモテに、キリストのご計画に沿った地区教会を建て上げるにはどうしたらよいか、一例をあげると、指導者としてふさわしい資格、神の家族の中でのお互いの係わり方、やもめの世話、指導者の任命、報酬、矯正など具体的に教えています。

このようなことの一つ一つがなぜキリストにとってそんなに重要なのでしょうか。真理と地区教会の家族の秩序との間に、また信者の共同体における関係の構造と真理の保持、すなわち福音の宣教とキリストの教えとの間には明らかな関係があるのです。地区教会は真理の柱また土台です。そこでキリストは、真理が守られ健全な方法で行なわれるように、共同体が整えられることを望んでおられるのです。

この指針は、すべての教会に対して与えられているのでしょうか。パウロは、パウロが係わったすべての教会がこの指針に従うことを期待していたのでしょうか。パウロは、秩序が保たれていない教会は、不完全なものと考えていました(テトス1:5)。だからこそ、手紙や、同労者を送ることで、新しい教会と共に労苦しようとしたのです。新しい教会はこの指針にあるように建て上げられる必要があったからです。パウロとはいったい何者なのでしょうか。なぜ私たちはパウロの言うことに従わなければいけないのでしょうか。パウロの務めが、キリストの教会に対するご自身の務めを明らかにすることだったからです。ですからパウロに従うことはキリストに従うことになるのです。また、多くの人が違った教えを持ち込んで教会全体を混乱させる可能性があり(テトス1:6-11)、教会は、信仰の共同体として、そのような間違った教えに負けない、しっかりとした秩序を据える必要があったのです。

鍵となる引用を読んで考えてみましょう。

学者でウェストミンスター神学校の尊敬される教授であったヴァーン・ポイスレス(Vern Poythress)は、テモテへの手紙第一3章14節から

16 節のところから、著書 *The Church as a Family: Why Male Leadership in the Family Requires Male Leadership in the Home as Well* (家族としての教会：なぜ家庭で男性のリーダーシップが必要なように神の家族でも男性のリーダーシップが必要なのか)で同じような説得力のある議論をしています。

「最後に、使徒パウロはテモテへの手紙第一 3 章 14 節 15 節で、家族の中の役割の重要性を明確に語っています。

『私は、近いうちにあなたのところに行きたいと思いながらも、この手紙を書いています。それは、たとえ私がおそくなったばあいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。』

実際、この箇所に手紙全体の要点がまとめられています。『この手紙』とは、この手紙に書かれていることすべてと理解するのが自然です。従って、この手紙全体を書いた理由が、『神の家族でどのように行動すべきか』を示すためであったということになります。

『神の家族』という場合、神学的に二つの捉え方があります。すなわち、神の『家』ないし『神殿』での神との交わりという捉え方、神が統治される家族という捉え方です。聖書の中には、前後関係から、神が神殿としてご自分の民の中に住まわれるという考え方が強調されているところがあります (I コリント 3:10 - 17)。しかし、テモテへの手紙第一では、明らかに、家族の秩序や取り決めに対する概念の方が顕著です。教会の秩序は、家庭の秩序に似ています。教会員は、互いに自分の家族の一員のように接するべきです (I テモテ 5:1 - 2)。必要な時はお互いに助け合うべきです (I テモテ 5:5, 16)。そして監督は、自分の家族を治めることで発揮したように、神の家族をうまく治める人でなければなりません (I テモテ 3:1 - 7)。³

短い注解と引用から教えられたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....



論点を考える

私たちは自分流を好む文化の中で生活しています。多くの教会は、私たちはキリストの福音に従う必要があると信じています。しかし、どのように教会を秩序だてていくかは、個人的な好みの問題であると考えています。一世紀にパウロが諸教会に示した指針に従うことは、制限を与えるもの、狭いものにさえ思えます。グループでこの点について話し合ってください。また、真理を守ることと私たちの共同体生活を整える方法との関連性についても是非触れるようにしましょう。

論点：神の家族でどのように行動するか

話し合いの前に論点を考えてみましょう。

- 1. パウロが言う、神の家族の中でふさわしく行動するとはどういうことでしょうか。
- 2. なぜこのような家族の中での行動方針が重要なのでしょうか。
- 3. 真理を守ることと、家族の行動方針とは何か関係があるのでしょうか。真理を守ることと、私たちがキリストを証しすることとの関係はどうでしょうか。

話し合いの前に考えたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

小グループで話し合きましょう。

話し合いの後に自分の結論として考えたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



基本原則を適用する

今まで学んできたこと話し合ってきたことに、自分なりの応答をする時間です。十分時間をとって考えましょう。

最初の三つの段階を思い起こしてみましょう。

自分の生活への適用を考えてみましょう。

この課の学びの適用の中心は、重要な概念を理解し、自分の生き方はこの概念に照らしてどうだろうかとまず考えてみることです。そうすることが、この真理をあなたの生活に適用する大事な出発点になります。

一つの家族、すなわち家族の家族としての地区教会、という考え方を要約して書いてみましょう。なぜ今日この行動方針に従う必要があるのでしょうか。この方針に従うとすれば生き方はこう変わるのではないかと思わされたことも書いてみてください。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

第三課

信仰の家族の中で生きる

初代教会の時代、「家族の教科書」と呼ばれるものがありました。これには、個々の家族用ともっと大きな家族、つまり共同体用の二種類がありました。パウロが諸教会に宛てた手紙の中にはその両方が載っています。まず、個々の家族用の教科書を見てみます。そして次の課で、神の家族、すなわち、教会全体に対してパウロが具体的にあげている指針のいくつかを見てみたいと思います。

個々の家族用の教科書の目的は、それぞれの家族が、特に共同体生活の中でどのように生きるべきかという観点から、家庭生活の指針を示すことにありました。パウロとペテロは、当時の文化の枠組みを用いて、クリスチヤンの家族が教会、すなわち、神の家族の中でどのように生活すべきかを説明しています。個々の家族用の教科書は、新約聖書のエペソ人への手紙5章22節から6章9節とコロサイ人への手紙3章18節から4章1節まで、そしてペテロの手紙第一3章1節から7節の三箇所に出てきます。この課ではエペソ人への手紙を取り上げます。私たちの文化が、結婚と家庭生活の指針を定義し直そうとしている今、神様が計画された結婚と家庭を築くことがきわめて重要です。



みことばを学ぶ

聖書箇所を読みましょう：エペソ5：22 - 6：9

質問を読んでよく考えてみましょう。

1. 家族一人一人の基本的な責任とは何でしょうか。
2. パウロはどのような意味で、夫はキリストが教会を愛するように妻を愛さなければならない、と言っているのでしょうか。
3. パウロはどのような意味で、妻は夫に従わなければならない、と言っているのでしょうか。
4. 両親が子どもたちを主の「教育と訓戒」によって訓練するとは、どのような意味でしょうか。

今読んだ箇所为中心的な教えをまとめてみましょう。

学んだことを、短く文章にまとめる、箇条書きにする、注解する、図式化するなど、自分にとって一番わかりやすい方法で書いてみましょう。家族一人一人の役割を具体的に書いてください。その後で、家族に対する神のご計画を簡単にまとめましょう。

エペソ人への手紙 5 章 22 節から 6 章 9 節の中心的教え

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



文献に当たる

以下の解説は、この箇所を理解を深め、教えの内容を深く考えるためのものです。

エペソ人への手紙5章22節から6章9節の短い注解を読んで考えてみましょう。

最初に触れたように、教会に宛てられた手紙の中に三つの「家族の教科書」が出てきます。二つはパウロが、一つはペテロが書いたものです。これらの箇所から神様が家族をどのようなものとして計画されたかが理解できます。パウロの仕事は、キリストの務め、すなわち「家の秩序」ないし神の家族の指針を明らかにすることでした。そして、ここにパウロは、家族に対する家族の指針を述べています。つまり、これらの指針はまさにキリストご自身がご自身の家族、すなわち教会を構成している一つ一つの家族に計画されたことであり、従って、すべての教会が守り行なわなければならないという意味です。

この箇所の構成はとても簡単です。パウロは、妻よ、夫よ、子供よ、父よ、奴隷よ、主人よと家族の一人一人に直接語りかけています。家族を構成している全員に、論理的な順序で呼びかけがなされています。パウロはまず権威の下にある人に、妻よ、夫に服従しなさい。子どもよ、両親に従いなさい。奴隷たちよ、主人に従いなさい。と呼びかけ、次に権威を持っている人に向かって、夫よ、妻を愛しなさい。父親よ、子どもたちを忍耐強く訓練しなさい。主人よ、奴隷を親切に扱いなさい。と呼びかけています。この中に家族全員が含まれています。主人よ、奴隷よとの呼びかけがあるのは、当時多くの家庭が奴隷を雇ったり、年季奉公の形で置いていたからです。ですから奴隷も含めた家族全員に指示が与えられなければならなかったのです。というのも神の家族の最小単位が家庭だからです。奴隷と主人に対して与えられている教えは主に、今日も同じような家族構成を持つ文化の中で適用できます。

この箇所は初代教会の文化にのみ当てはまるものであるという人たちがいます。もしそうだとすると、次の二つが問題となります。まず、パウロの務めの内容が、キリストが、真理の所有者である世界中にあるご自身の家族をどのように整えようとしておられるかを明らかに示

すことであったことです。そしてまさにそのこと、すなわち信仰の家族それぞれに命令を与えるという務めをパウロはここで果たしているのです。二つ目は、エペソ人への手紙全体の目的を考えてみなければならぬということです。パウロはエペソの教会に対して、クリスチャンとしてどう歩むべきかを教えています。この箇所はその中心部分です。ここは、妻が夫に従うべきだということを教えているのではなく、お互いが、妻は夫に夫は妻に、従い合うべきことを教えているのだと言う人がいます。私たちは皆、互いに従い合うべきですから、ある面で、これは正しいと言えます。確かにパウロは、このすぐ前のエペソ人への手紙5章21節でそのように言っています。しかし、ここでの強調点はそれぞれ自分の責任を果たすべきだということです。すなわち夫は妻を導き愛すべきであり、妻は夫に従い尊敬すべきです。子どもは両親に従うべきであり、父は子どもに霊的な導きを与える責任を負うべきです。また奴隷は主人に従うべきであり、主人は奴隷を忍耐強く扱うべきであるということです。

なぜパウロは手紙のこの箇所でこのような言い方をしているのでしょうか。パウロが女性や子どもが嫌いだったからでしょうか。パウロはその当時の、女性の価値がほとんど認められていなかった時代の申し子に過ぎなかったのでしょうか。この箇所はその答えを明確に述べています。夫は、キリストが私たちが愛したと同じくらいに、たとえ、命を捨てなければならぬとしても、妻を愛しなさい。夫は妻を大切にしなさい。子どもに対しては、しっかりと、忍耐強くその成長を見守りなさいと命じています。では、どうしてこのような指示がなされているのでしょうか。それは、キリストがご自身の民に対して計画をもっておられるからです。その中心は、家族の家族である教会です。秩序ある教会となるためには、教会を構成している各家族に秩序がなければなりません。物事に秩序を生み出されたのは神です。ですから、神が創造された秩序に従うことで、家庭も教会もうまく機能するのです。

現在の西洋文化の中では、これは最初、異質なもの、古いもののようにさえ思われます。というのは、私たちの文化があまりにも違うメッセージを発信しているからです。私たちはここで示されている指針とは正反対の方向に進んでいます。このままいくとどうなるのでしょうか。家庭はバラバラになり、権威は地に落ち、男性が指導的役割を担っている家庭がもたらす恩恵も特性も安心感も持たない子供の世代を生み出すことになります。この家庭崩壊の最も深いところを取り扱

った本の一冊が、デヴィッド・ブランケンホーン (David Blankenhorn) の *Fatherless America : Confronting our Most Urgent Social Problem* (父親不在のアメリカ:最も急を要する社会問題) です。一旦、家庭の指導者としての父親の役割が放棄されると、家庭や地域のあらゆるところが崩壊し始めます。プロミスキーパーのような運動も、もし私たちが家庭や教会に対するキリストの教えに従えないなら、続けて行く意味はほとんどないでしょう。キリストの教会に対する計画には各家庭への命令が含まれており、主は私たちが主のご計画に従うことを望んでおられます。神は素晴らしい理由があってこれを私たちに与えておられるのです。

ここでは、エペソ人への手紙のこの箇所の、結婚や家族関係についての重要な指針の多くに関しての注解はせず、再度、基本原則シリーズⅡの二冊『結びつきを楽しむ—結婚の基本原則』と『信仰を継承する—家族生活の基本原則』で取り上げ、委ねること、導くこと、尊敬すること、その他家族関係におけるいくつかの個人的な面に対する教えを取り上げたいと思います。

鍵となる引用を読んで考えてみましょう。

以下は、スティーブン・B・クラーク (Stephen B. Clark) の不滅の作品 *Man and Woman in Christ: An Examination of the Roles of Men and Women in Light of Scripture and the Social Sciences* (キリストにある男女:聖書と社会科学に見る男女の役割についての考察) からの引用です。これは 800 ページに及ぶ本で、家庭と教会両方の家族の教科書をあらゆる面から余すところなく扱っています。また、信頼できる社会科学の調査を客観的に用いることで、家族と教会に対するキリストのご計画の知恵の正しさを証明しています。

「エペソ人への手紙 5 章 22 節から 23 節は、並行箇所、コロサイ人への手紙 3 章 18 節から 19 節と同様、書簡の中の『家族のきまり』(Haustafel) と一般的に言われる部分です。エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙には両方とも、妻と夫、子どもと両親、奴隷と主人に対する勧告が書かれています。ペテロの手紙第一にもこれと同じような勧めがあり、構成上も類似しています。ペテロの手紙第一のよく似た並行記事もそうですが、エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙の家族のきまりは、牧会書簡の一部や使徒教父の資料の一部も含め、どのようにしたらお互いの大事な関係を、神が定められたものに近づけることができるか

をクリスチャンに伝えています。初代教会の教師たちは新しくクリスチャンになった人に、人間関係はこうあるべきだと教えたのではないのでしょうか。

例えば夫と妻の関係のような特別な人間関係はどうあるべきかという教えは、新約聖書の各所に見られる、もっと広い意味での人間関係全体に関するクリスチャンへの教えの一部でした。エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙の家族のきまりは、『キリストのからだに加わってどのように生きるか』という表題をつけることができるような、もっと大きな項目の中（エペソは4：1から、コロサイは3：1あるいは2：8から）に入っています。エペソ人への手紙4章1節から始まるこのより大きな項は、からだの一員として統一の取れた生き方をするようにとの勧めで始まっています。次に古い生活と新しい生活、キリストにあって互いに愛し合うこと、聖さに生きること、といった議論が続き、その後、『家族のきまり』が続きます。結婚に関する命令のすぐ前でパウロは、『怒っても罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません』、『無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。』などの勧めをしています。つまり、妻と夫の関係に関する命令の背景にあるのは、基本的なクリスチャンの愛の教えです。結婚して神の秩序の中で素晴らしい生き方をするためには、夫も妻も、無慈悲、憤り、怒りなど罪深い行動をすべて止め、お互いに親切にし、心の優しい人にならなければならないのです。

エペソ人への手紙（またコロサイ人への手紙）に書かれている『家族のきまり』は、それぞれの関係に含まれるすべてのことを教えているわけではありません。むしろ、ここで勧められているのは、非常に具体的な勧め、ここにあげられている人間関係の秩序に関する勧めです。」⁴

短い注解と引用から教えられたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....



論点を考える

前にも述べたように、この男女の役割についての教えは、私たちの西洋文化のなかでは、社会一般の考え方と違う方向に行っているため、簡単に退けられてしまいます。この教えが、個人の基本的な価値を抑圧し、冒涇するもののように見えるからです。しかし実は権威という問題全体が危機に瀕しているのです。社会が個人の権利や必要に焦点を当てる時、見落されがちなのが、権威に対する間接的な攻撃です。最初は捉え難いのですが、最後には権威に対して徹底攻撃が仕掛けられるのです。愛も互いの尊敬もやさしい関係もなしに、家族を家族の教科書に従って建て上げるとどうということになるか、話し合しましょう。また家族の家族である地区教会の中で秩序を保つための、秩序ある家族の関係を話し合しましょう。

論点：各個教会の指針が教えること

話し合いの前に論点を考えてみましょう。

1. なぜ、キリストは各個教会家族が、ご自身が定められたように秩序正しく行動するようにと計画されたのでしょうか。
2. 各家族の秩序と、家族の家族である地区教会の秩序との関係はどのようなものだと思いますか。
3. この指針を拒否して、家族の秩序に民主主義的な方法を取り入れた時どのような結果を招くことになると考えられるのでしょうか。
4. キリストのご計画全体の中で、すなわち、愛との関連の中で、この家族の指針を考えない場合、どのような結果を招くことになると考えられるのでしょうか。

話し合いの前に考えたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

小グループで話し合いましょう。

話し合いの後に自分の結論として考えたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



基本原則を適用する

今まで学んできたこと、話し合ってきたことに、自分なりの応答をする時間です。十分時間をとって考えましょう。

最初の三つの段階を思い起こしてみよう。

あなたが育った家庭は、キリストが計画されたものと違ったかもしれません。今信じていること、また今の家庭のあり方とも違うかもしれません。そしてあなたは結婚関係、さらにはおそらく家族関係全体を建て直す必要があるのかもしれません。

自分の生活への適用を考えてみましょう。

下の空欄に、キリストの計画された家庭と比べてあなたの今の家族、すなわち、家族のあり方をどう思うか書きましょう。

キリストのご計画に対して、あなたの思い描いている家族はどのような点で適合していないかまとめて見ましょう。また、見直す必要があると思えることはなんでもいいですから書いてください。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

第四課

家族の家族の中で生きる

前の課でも述べましたが、初代教会の時代には、「家族の教科書」と呼ばれるものがありました。これには、個々の家族用ともっと大きな家族、つまり共同体用の二種類がありました。第三課では、個々の家族用の教科書に焦点を当てました。この課では、共同体のために書かれた家族の教科書に焦点を当てます。牧会書簡（テモテへの手紙第一、第二とテトスへの手紙）は、個々の家族によって構成された家族である地区教会という家族に向けた、家族の指針を論じています。共同体のための家族の教科書は、個々の家族用の教科書と似た形を取りながら、共同体生活での人間関係を整えるにはどうすればよいかを扱っています。妻や夫、その他の人たちに宛ててではなく、共同体の各部分、すなわち、長老、執事、年を取った男女、若い男女、やもめたちに宛てて書かれています。この共同体のための家族の教科書で最も基本となる箇所がテトス2章です。この課ではそのところから学びたいと思います。



みことばを学ぶ

聖書箇所を読みましょう：テトス2：1 - 15

質問を読んでよく考えてみましょう。

1. 老人たちに対する家族の指針とはどのようなものですか。年をとった婦人に対して、若い婦人に対して、若者に対してはどうでしょうか。
2. この箇所から、神はご自身の地区教会の共同体生活をどのように計画されたと思いますか。
3. この共同体の指針は、世に対する地区教会の効果的な証しと、どのような関係があるのでしょうか。

今読んだ箇所の中心的な教えをまとめてみましょう。

学んだことを、短く文章にまとめる、箇条書きにする、注解する、

図式化するなど、自分にとって一番わかりやすい方法で書いてみましょう。共同体の役割、人間関係にはどのようなものがあるか、またそこからキリストがご自身の教会である共同体の生活をどのようなものにしようとされていたと考えられるか、さらに、教会生活がそのようなものになることで、世に対する教会の証しがなぜ効果的なものとなるのかについて触れるようにしましょう。

テトスへの手紙 2 章 1 節から 15 節の中心的教え

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



文献に当たる

以下の解説は、この箇所を理解を深め、教えの内容を深く考えるためのものです。

テトスへの手紙 2 章 1 節から 15 節の短い注解を読んで考えてみましょう。

テトスへの手紙 2 章 1 節から 15 節は、パウロが自分にとって不可欠な働き人の一人、テトスに書いた手紙の丁度真ん中に位置しています。この手紙全体は、共同体の生活全般について述べるのに当時用いられていた、家族の教科書の手法で書かれています。もちろんこの手紙の場合、ここに書かれている共同体の生活とは地区教会の生活のことです。テトスへの手紙 1 章 5 節で、パウロは、テトスをクレタ島に残したのは、テトスがクレタ島の諸教会で「残っている仕事の整理をする」ためであったと言っています。これは、諸教会でやり残したことを完成させるという意味です。教会としての共同体の生活は、まだキリストのご計画通りにいっていませんでした。パウロはテトスに、まず、すべての教会に長老を任命するように言っています。テトスは、すぐれた人格の持ち主で自分の家庭を良く治めている人、しかもキリストの教えに通じている人を探さなければなりません。キリストの教えを無効にし、別の教えをもたらそうとする人に対して論駁することができるためです。なぜでしょうか。自分の教えによって家々を破壊する者が多く現れようとしていたからです。自分の家庭をキリストの教えで建て上げており、その経験から、だれかの理解が揺らいだ時に、正してやることのできる指導者を教会は必要としていたのです。このことから、なぜキリストが家族のための組織を計画されたかの理由が見えてきます。自分の家庭を良く治める人が共同体全体を牧する長老の一人となるべきであり、そうすることによって、教会はキリストの教えに常に堅く保たれるのです。

続いてパウロは、エペソ人への手紙の家族の教科書のところで用いたと同じように、直接、秩序立てて、共同体の一人一人に語っています。テトスへの手紙では、妻や夫、子ども、父、奴隷、主人ではなく、共同体としての務め、すなわち、共同体の中で老人、年をとった婦人、若い婦人、若い人々はどのように振舞うべきかに焦点を当てています。パウロはまず、この箇所を始めるに当たり、自分の教えは「健全な教え」

で、人々の生活と完全に合致するものであると言っています。老人たちは、人格、信仰両面において、健全であるように。年をとった婦人たちには、敬虔で、権威に対してふさわしい態度（畏敬の念）を持ち、噂話をせず、若い婦人に対して、家庭と教会での正しい振舞い方を教えるように。若い人たちには、老人たちと同じように健全な人格、健全な教えを持ち、特に良いわざをしていることが皆に知られるようにと言っています。またここでも奴隷に対しては、合法的に自分たちを奴隷としている家の主人に対しては共同体の中でも同じ態度を取るべきである、と言っています。

それぞれが共同体の中でどのように生きるかについて、この箇所には書かれているいくつかの事に注目してみたいと思います。男性は健全な信仰を持っていなければなりません。これは大事なことです。というのは、男性は自分の家族一人一人に責任があり、異なった教えが共同体に広がった時、家が破壊されないように皆を守らなければならないからです（テトス1:10、11）。年をとった婦人たちは、噂話や、若い婦人たちが家庭生活に満足しないことで、家庭が内部崩壊しないよう家族を守らなければなりません。パウロは、女性が、積極的であったり、家の外で仕事をすべきではないと言っているのではありません。女性は常に「家庭の中心」であるべきだと言っているのです。そしてこの教え全体は、健全で、理にかなった、調和の取れた共同体生活をするためにあるのです。

もう一つ大切なことは、教え全体に織り成されている概念、健全で良識ある生活という考え方です。文字通り、バランスの取れた生き方という考え方です。ここでは、バランスの取れた生活の大切さを考えています。一つは上にあげた理由、すなわちキリストの教えに根ざした健全で、安定した共同体生活をするためです。しかし、それだけではありません。私たちには、すべての国民を弟子とするという使命が与えられているのです。ですから、地域社会での証しとなり続けることが、この使命を果たすことにもなるのです。教会という共同体で、またそれぞれの家庭で、バランスの取れた敬虔で調和のある生活をするなら、私たちはキリストの福音に大きな影響を及ぼすことになります。パウロがどのような言葉でそれぞれへの指示を結んでいるか、幾つか見てみましょう。

「……それは、神のことがそしられるようなことのないためです。」(2:5)

「……そうすれば、敵対する者も、私たちについて、何も悪いことが言えなくなって、恥じ入ることになるでしょう。」(2:8)

「……それは、彼らがあらゆることで、私たちの救い主である神の教えを飾るようになるためです。」(2:10)

地区教会が地域社会の中でどのような生き方をするかで、イエス・キリストの福音の影響に差が出てきます。家庭生活をどのように送るかでも同じです。当然のことではないでしょうか。私たちの周りで、家庭が地域社会が崩壊しています。そして世は教会を注視しています。だからこそ私たちの証しが特別な説得力を持つことになるのです。

最後になりましたがここでもう一つだけ言っておきたいと思います。この教えは今日の私たちに対してなされたものではないとまだ思っている方は是非、テトスへの手紙2章15節に注目してください。これ以上強い言い方はないのではないのでしょうか。「仕事の整理」をしている教会で、テトスは誰にも「自分の教えを軽んじられては」なりません。テトスは、あらゆる権威を持って語るよう、委ねられていたのです。今日この教えを軽んじるということは、パウロの教えを軽んじることになり、パウロの教えを軽んじるということは、家族と神の教会に対するキリストのご計画全体を軽んじることになるのです。

鍵となる引用を読んで考えてみましょう。

「テトスへのこの力強い手紙を貫くパウロのテーマは明確で、『クリスチャンの生き方を示すこと』です。ところが、パウロの一番の関心事は、偽教師の不敬虔な生き方と結果的にその生き方がクレテの新しくクリスチャンになった人たちに及ぼす影響でした。そしてこれが、テトスに、クレテに残って『残っている仕事の整理をするように』(1:5) 指示した時、パウロが最重要事項と考えていたことでした。

この偽教師たちは、『神を知っていると口では言いますが、行いでは否定しています。……どんな良いわざにも不適格です。』(1:16) とパウロは書いています。

この問題を解決するためにパウロが取った見事な策は、クレテの人の中から長老を任命し、彼らが敬虔な生き方を示すことで偽教師のマイナスの影響に対抗することでした。そこで、パウロはこの手紙の最初の部分に、霊の指導者としての生き方だけでなくその家庭生活はどのような特質を備えていなければならないかを列挙したのです。

霊の指導者たちは、道徳的、倫理の手引き（どのように生きるか）だけでなく、健全な教義（何を信じるか）も十分に教えられていなければなりません。そして、この『信頼できることば』によって新しいクリスチャンを励まし、さらに、人を迷わしている偽教師たちを公然と非難し、論破しなければなりません。

しかし、そのためにパウロが取った根本的な解決策は、『健全な教え』そのものを教えることではありませんでした。もしそうだったとすれば、この健全な教えがどんなものか、注意深く一つ一つ説明していたはずですが。しかしパウロはそうすることはせずに、健全な教えに付随するものにもっぱら注目しています。

この手紙でパウロは、今日、クリスチャンの社会に広がっている非常にゆゆしい方法論的誤信の核心を突いています。ある人々は、『健全な教え』を強調すれば自動的に『敬虔な生活様式』を持てるようになると信じ、教えています。もしそうなら、パウロは、健全な教義に付随するものとは何か、すなわち、クリスチャン指導者及びすべてのキリストのからだに属する一人一人が健全な教義を受け入れた時、どのような生活をするようになるかについて手紙の大半を割いて説明することはしなかったでしょう。だからこそ手紙は2章に入るとすぐに『あなたは、健全な教えにふさわしいことを話さない』（2：1）と始めているのです。

パウロは、指導者たちから、キリストのからだに属するすべての人々に注意を向けました。パウロは教会の各層の人たちにとって、極めて具体性を持つものにする必要があると感じたのです。そこで老人たち、年をとった婦人たち、若い婦人たち、若い人たち、奴隷たちそれぞれに語るようテトスに指示したのです。さらに、パウロは、特に統治する権威に対してどのように行動すべきか、また救われていないこの世全体に対してどのような態度を取り、どのように行動するかについて論じています。』⁵

以上は、ジーン・ゲッツ（Gene Getz）の *The Measure of a Christian*（クリスチャンの成熟）からの引用です。ゲッツは、多くの人から、アメリカの教会刷新運動の父と見なされており、教会に対する新約聖書の原則について、多くの本を出版しています。そしてそのどれもが、堅実で聖書的です。

短い注解と引用から教えられたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



論点を考える

キリストの教えは、明確な論理性を持っています。主は私たちが主の家族に入れてくださり、主のご計画全体を私たちに委ねてくださいました。今日の私たちは、福音は受け入れるが、信徒の共同体としてどのように生活すべきかについての主の教えには注意を払わないということが往々にしてあります。自分の好きにできると考えているようです。しかし、ご自身の教会に対するキリストのご計画の目的ははっきりと示されています。そしてそれに主のみわが全体が直接関わっています。主の教会と主の家族に込められた主のご計画の目的を、キリストのみわが全体の中で思い起こしてみましょう。

論点：神の家族への指針が教えること

話し合いの前に論点を考えてみましょう。

1. なぜ神は、神の家族の機能をこのように計画されたのでしょうか。
2. 共同体生活は、家族を強め、神の目的を遂行するためにどのような役割を果たすのでしょうか。
3. 教会が適切に「整えられる」ことと、教会の中の各家族の状態とはどのような関係にあるのでしょうか。
4. 共同体としての家族への指針は、教会の使命とどう関わっているのでしょうか。またどのような意味で、神の福音の美しさを引き立てるものとなっているのでしょうか。

話し合いの前に考えたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

小グループで話し合みましょう。

話し合いの後に自分の結論として考えたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



基本原則を適用する

今まで学んできたこと話し合ってきたことに、自分なりの応答をする時間です。十分時間をとって考えましょう。

最初の三つの段階を思い起こしてみましょう。

神のご計画に従って信仰の共同体に属して生活するという事は、まずあなたの人生の今この時、あなたに役割と責任があるという自覚を持つことです。

自分の生活への適用を考えてみましょう。

下の空欄に、信仰の家族の中でのあなたの今の役割について、あなたの考えを書きましょう。キリストの家族の一員として、あなたの今の生活で、最優先させるべきものはなんでしょうか。

信仰の共同体の中でのあなたの今の役割と、キリストの家族の一員として、今最優先させるべきこと。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

第五課

人生の優先事項を定める

私たちはキリストのみわざ全体を理解し、私たちの家族と教会に対する神の家族の教えを含む、主のご計画の基本的な意味を理解できたのですから、人生の優先事項を決める準備ができたと言えます。一般論としては、私たちは皆同じ優先事項を持ち、まずその優先事項に沿って自分の人生を計画する必要があります、そして初めて具体的な人生設計を立てることができると言えます。私たちがキリストの本当の弟子になろうとしているのであれば、私たちの人生、私たちの家族、私たちの教会に対するキリストのみわざ、キリストのご計画、キリストの指針に合わせて、私たちの生活を変える必要があります。私たちの人生に対する主のみこころが何であるかをしっかり理解し、賢く生活することを学ばなければなりません。私たちの人生に対する主のみこころの大部分は、主のみわざ、すなわち、家族の教科書を含む主の教会に対するご計画の中に啓示されています。この課では、エペソ人への手紙5章15節から21節を学びます。この学びを通して、私たちは、キリストのご計画の中で、賢く生きていこうという思いにさせられるはずです。



みことばを学ぶ

聖書箇所を読みましょう：エペソ5：15 - 21

質問を読んでよく考えてみましょう。

1. エペソ人への手紙のこの箇所の、賢い人のように歩むとはどのような意味でしょうか。主のみこころは何であるかを悟るとはどのような意味でしょうか。
2. 神の御霊に満たされることと、賢く歩み、主のみこころを悟ることとはどのような関係にありますか。
3. 賢く歩みなさいという命令と、御霊に満たされなさいという命令とは、どんな点で似ていますか。
4. 賢く歩み、御霊に満たされることと、エペソ人への手紙5章22節から6章9節に書かれているキリストの家族の指針に従うこととの間にどのような関係がありますか。

今読んだ箇所の中心的な教えをまとめてみましょう。

学んだことを、短く文章にまとめる、箇条書きにする、注解する、図式化するなど、自分にとって一番わかりやすい方法で書いてみましょう。賢く歩み御霊に満たされることと、各家族、さらには神の家族に対するキリストの教えに私たちの生活を従わせることにどんな関係があるかについて触れるようにしましょう。

エペソ人への手紙 5 章 15 節から 21 節の中心的教え

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



文献に当たる

以下の解説は、この箇所の理解を深め、教えの内容を深く考えるためのものです。

エペソ人への手紙5章15節から21節の短い注解を読んで考えてみましょう。

この箇所は非常に基本的なことを述べていますが、文脈から注意深く考えるようにしないと、重要な論点の多くを誤解しやすいところでもあります。この箇所は第三課で学んだエペソ人への手紙5章22節から6章9節に出てくる「家族の教科書」の一つのすぐ前に来ています。

この箇所は冒頭、賢く歩みなさい、つまり上手な歩みをしなさいと命じています。具体的には、私たちは一人一人主に仕える時間が定められているのですから、その時間を十分に生かして用いなければならないという意味です。信者から成るキリストの共同体の外の、私たちの周りの人生は、悪意に満ち、その目指すところはキリストのそれとは異なります。私たちは、この世の楽しみで一杯の人生、それをここでは酒に酔った慎みのない生活と表現していますが、そのような人生を送るか、御霊に満たされた生活をするかのどちらかです。この文脈を見ると、御霊に満たされるということは、キリストとキリストの御旨で私たちの生活を満たしていただくことだとわかります。その中心は、「詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美」することです。これは、共同体、すなわち各家族と家族の家族の両方の生き方を示しています。それは、この箇所に「互いに」という言葉が出てくることや、「家族の教科書」がこのすぐあとのエペソ人への手紙5章22節から6章9節に続いていることから分かります。コロサイ人への手紙3章16節の並行記事では、御霊に満たれることと、「キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに住ませ…」ることとが同義になっています。ですから、御霊のもので満たされるということは、酒やこの世のあらゆる快楽で満たされることではなく、私たちの生活をキリストとキリストの目的に沿って整え、私たち自身をキリストのことばで満たすことです。

ここで重要なのは、機会を十分に生かして用い、賢く歩むことです。これは、キリストとご自身のご計画に基づいて、人生の優先事項を定めることを意味します。エペソ人への手紙の別の箇所で既に学んだように、主のご計画の中心はご自身の教会です。そして「家族の教科書」が、キリストのご計画に基づいて私たちの生活を整える枠組みを提供してくれています。主の目的が私たちの目的にならなければならない（エペソ3:8 - 11）という意味です。主の働きが私たちの働き（マタイ28:19、20）とならなければならない。主の優先事項が私たちの優先事項（テトス2）とならなければならないという意味です。私たちは

賢く歩み、機会を十分生かして用いなければならないのですから、この世がしているように、決して時間をただ無駄に過ごさないで、日々の計画をしっかりと立てなければなりません。

鍵となる引用を読んで考えてみましょう。

ここで私たちの優先事項を決める前にしなければならないことは、私たちの目的全体をもう一度思い起こしてみることです。第一課（20ページ）で取り上げたマイケル・グリフィスの引用を読み返してから、この課で引用した残りの部分を読んでください。

「もちろん、ここまで申し上げてきたことは、福音を宣べ伝える宣教師とか、フルタイムの牧師にとってのみ重要なものではありません。忠実なクリスチャンなら誰でも、皆一人一人、所属しているクリスチャン共同体の中で働き、奉仕する責任があります。またそれだけでなく、教会がさらに成長するために、外に向かって伝道していきたいと思うようになるはずです。教会が今のままの大きさを維持するだけでは決して満足せず、今まで以上に新しい所に出て行って伝道し、新しい姉妹教会を建て上げようと願うはずです。

今、あなたのクリスチャン生活の中で、地区教会はどのような位置を占めているのでしょうか。

教会を、信頼される立派な共同体として建て上げることは、全生涯をかける価値ある仕事と捉えているのでしょうか。」⁶

次の引用は、フランシス・シェーファー（Francis Schaeffer）からのもので、シェーファーは、地区教会を私たちの人生の中心に置くことがいかに重要かについて、示唆に富む洞察をしています。

「次の点に注目しましょう。クリスチャンはいるが、クリスチャン共同体はないという可能性はあっても、クリスチャンのいないクリスチャン共同体はありえません。逆に、福音派の保守派として、クリスチャンは個人的に神の前に出る必要があることは理解できますし、その必要のためには戦いも辞しません。そのようにして、個人的に神の前に立つことはできますが、そのような状態は共同体に加わっていて、なおかつ神の前に個人的に立つ場合と比べて不健全なものと言えます。私たちは完全な個人主義に立ってはなりません。クリスチャンになった私たちですから共に結ばれているべきです。前にも言いましたが、教義に正当性があるように、共同体にも正当性があるのです。

クリスチャンの共同体の中には、当然、地区教会、神学校、キリスト教大学、宣教団等々色々な形があります。これらすべては、形は少しずつ違っていても、クリスチャンの共同体ですし、クリスチャンの共同体であるはずです。しかし、すべて同格とは言えません。地区教会を別にすれば、他は皆、時代のそれぞれの必要に応えるために出てきたものだからです。しかし、教会の形態は、私たちが生きている時代、つまりキリストの再臨まで、新約聖書の中で神から命じられています。』⁷

最後は、ハワード・シンダー (Howard Syndere) からの引用です。シンダーは福音派のメソジストで、新約聖書の原則に基づいた地区教会の回復についての本を何冊か出しています。

「霊性は、思いやりの通う共同体の中で最も成長します。共同体の中で他の信者たちと分ち合うこと無しには、決して理解できない霊の真理、決してクリスチャンとして到達できない水準があります。そのように神が計画されたのです。聖霊は色々なところで、他の人を通して私たちに働かれます。パウロが「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです」(エペソ 4: 15 - 16) と言ったのはこのことです。一つのからだに属している多くのメンバーたちが互いに影響を与え合うこと、これがからだの命です。カール・バルトは『新約聖書で【建て上げる】と言う時は常に共同体を指して言い、従って私が自らを啓発できるのは、私が共同体を啓発している時のみである』と言っていますが、うまく言い得ていると思います。』⁸

短い注解と引用から教えられたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....



論点を考える

家族の家族の一員として生活していく上で私たちには目的があり、それに伴う責任があります。ですから、賢く、時間を十分に生かして生活する義務があるのです。私たちはもうこの世の生き方に合わせることはできません。キリストの目的と優先事項を、100パーセント私たちの人生の目的、人生の優先事項の目標としなければなりません。キリストの、ご自身の教会に対するご計画全般に照らして、あなたの人生の目標、基本となる人生の優先事項をよく考えましょう。

論点：人生の優先事項を定める

話し合いの前に論点を考えてみましょう。

1. キリストの教会に対する目的を考えた時、あなたの人生の目的の全体像はどのようなものであるべきでしょうか。
2. 家族の教科書に沿って作られているキリストの教会に対するご計画は、あなたの人生の優先事項をどのように具体化するでしょうか。
3. あなたの人生の優先事項を考えた時、「機会を十分に生かして用いる」ということは、どういう意味を持つでしょうか。

話し合いの前に考えたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

小グループで話し合いましょう。

話し合いの後に自分の結論として考えたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



基本原則を適用する

今まで学んできたこと話し合ってきたことに、自分なりの応答をする時間です。十分時間をとって考えましょう。

最初の三つの段階を思い起こしてみましよう。

機会を十分に生かして用いるということはまず、教会とキリストの家族の一員としての私たちの生き方に対する、キリストのご計画全体に照らして、私たちの人生の目的とそれに伴う優先事項を明確にすることです。

自分の生活への適用を考えてみましょう。

下の空欄に、この時代に対するキリストのご計画についてまとめてみましょう。次に、キリストの目的に沿ったあなたの人生の目的を書きましょう。さらに、第三課と第四課で学んだ家族の教科書から考えられる、あなたの人生の優先事項の核の部分を書き出してみてください。

キリストのこの時代のご計画、あなたの人生の目的、優先事項の核心部分をまとめましょう。

第六課

生活を一新する

私たちは、教会がキリストのご計画全体の中心であることを学びました。またキリストが、ご自身の教会に対する務めを持っておられることを見ました。そしてその教会は、家族、すなわち、個々の家族からなる家族として構成されています。そして、この家族には、教会という家族と個々の家族の両方に宛てられた家族の指針があります。私たちは、このご計画に基づいて生活を整えなければなりません。

この課では、私たちの生活がすべての領域で変わるように、最初の五課で導き出した適用を総合してみたいと思います。多忙な現代社会にあって、本気になって考える時間を取ることはなかなか難しいことです。最初の五課から多くのことを学びましたが、更に、実際これらの真理を私たちの生活の中に生かしていくには更なる努力が必要です。しかし、これらの真理を総合して用いるなら、私たちの生活を一新する重大な変化をもたらす力として必ず大きな効果を発揮します。



心を明け渡す

思い巡らし、記録し、祈る

書いてみることは、学んでいる事柄の重要性をさらに深く熟考する優れた方法です。心に思い浮かべたことを言葉にすることができるからです。また私たちの心を照らし、足りないところを示すために、聖霊がみことばを通して語っていることをはっきりさせてくれます。次に祈るべきです。神が私たちの心を永遠に変えてくださり、成熟を目指して成長していきたいという願いと熱意を与えてくださるよう、祈り求めるべきです。

この課では、今までの五つの課で学んだことを復習します。それぞれの課を学んで、あなたの生活に何が起こりましたか。紙に書き、書いたことを思い起こしてください。どのような新しい確信が生まれましたか。神はすでにあなたの生活に何を始めてくださっていますか。

もっと忠実に従い続けていればよかったと願わされた領域がありますか。最も心を動かされたことは何ですか。最も足りなさを覚えさせられたことは何ですか。最も奮起させられたことは何ですか。あなたの人生哲学はどのように変わりましたか。

最後に、思い巡らしたことを、一つの主要な祈りの課題にまとめてみましょう。神のご計画に基づいて自分の人生を決めていけるようにと神に願うとすれば、あなたならどのような祈りをしますか。祈りの課題を短く書いてください。適当な大きさのカードに書き写し、持ち歩きましょう。そして定期的に祈ってください。数週間かけて、神が祈りに答えてくださったと思うことを何でも良いですから、カードの裏に書いていきましょう。

キリストのご自身の教会に対するご計画に基づいてあなたの生活を整えるためにはどのようにしたらよいか、考えたことを書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

祈りの課題

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



思いを明け渡す

明確な確信を持ち、みことばを暗記する

今まで学んできたことを総合すること、つまり自分の思いを系統立てて表し、明確な確信となるようにすることが是非とも必要です。まず、キリストが、個々の家族と神の家族をどのように整えてほしいと私たちに願っておられるのかも含め、ご自身の教会に対するご計画について、前の五つの課で学んだことから得られた確信を簡潔に文章にまとめることから始めてみてください。次に、あなたの確信を裏付ける重要な聖書の箇所を書き出しましょう。最後に、その中から少なくとも一つ、聖書箇所を選び下書き出し暗記し、学び会で暗唱してみてください。適当な大きさのカードの片面にそのみことばと聖書箇所を

書き写し、もう片面に気付いたことを書きましょう。六週間ぐらいかけて、そのみことばを思い巡らしてみてください。

家族の家族の中で生きるための主たる確信

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

重要暗唱聖句

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



生活を明け渡す

決断し、目標を定め、習慣化する

各課の「基本原則を適用する」のところを復習してください。各課ごとに、具体的に私たちの生活にどう適用できるかを考えることと、学んだことから生活全般を見渡し、人生の目的や生き方を変革し始めることとは別です。そしてこれは、キリストのご自身教会に対するご計画と家族の教科書に基づいて、私たちの生活を建て上げる上で、是非とも必要です。

これらの原則が私たちの生活と一体となるために、やらなければならないことが幾つかあります。まず、各課の「基本原則を適用する」の項目のところで、この課で今までにやったことをもう一度思い起こしてみましよう。何か決断を迫られることがありますか。例えば、今の生活で最優先されているものを見直す必要があるでしょうか。時間を十分に生かして用いているでしょうか。主のみこころを本当に理解していますか。あなたの家族はどうでしょうか。この冊子を学んで、あなたの人生の目標全般をどのように修正する必要があると思いますか。

決断、目標、生活習慣

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....